早稲田大学大学院 創造理工学研究科

博 士 論 文 概 要

論 文 題 目

米国における市民スチュワードシップにみる環境倫理概念の拡張

An Expanded Concept of Environmental Ethics
Emerged from Citizen-based Stewardship in the United States

申 請 者

矢口	哲也
Tetsuya	YAGUCHI

2020 年 5 月

本論文は建築や都市計画の分野ではまだなじみの薄いスチュワードシップという概念を用いて、米国の都市設計・開発プロジェクトにみる環境倫理の概念の拡張を論じている。一般的なスチュワードシップの定義とは「高度な信頼関係に基づく、責任を持った資源や環境の管理と運用」とされ、近年では、農学、林学、環境学をはじめとする様々な分野において、自然資源や生態系保全のための倫理および規範として論じられている。

本研究ではスチュワードシップの対象を都市やその周辺部、さらには社会環境にまで拡大、その担い手としての市民や市民組織の連携に着目している。これを新たに市民性とスチュワードシップの複合概念、「市民スチュワードシップ」として再定義し、米国での事例を用いて、身の回りの物理的・社会的な環境への自発的・持続的な働きかけにみる、環境倫理概念の拡張を明らかにした。

第１章「研究の背景」では市民スチュワードシップの定義と位置付けを行っている。スチュワードシップの倫理・規範的側面に着目し、文献調査により時代背景と共に変化する環境倫理概念を整理した。

二十世紀前半までの環境倫理概念は、主にピンショーの資源保全主義に代表される責任のある自然資源の活用と、ミュアーに代表される自然環境の保護が主流であった。戦後は行き過ぎた保全主義、人間中心主義への反省から、生態系中心主義や地球全体主義などの倫理観が生まれ、1980年代以降は、環境倫理概念は多様化し、人種・性別・貧富の差による不公正な環境の是正を目指す環境正義や未来世代の生存可能性に対して責任ある資源の利用を訴える世代間倫理をその視座に包含するようになった。同時に、対象とする環境も農地や自然環境から、次第に都市の構築環境や文化的・社会的環境までに拡大していた。さらに、今日的なスチュワードシップの特徴として①スチュワードシップ発揮の場が都市やコミュニティを含むより広義な環境へと拡大、多様化していること、②人間―環境の関係は双方向性および互酬性を前提としたものであること、③市民組織のネットワーク形成により、スチュワードシップ活動が活性化されることが示唆された。

第２章「市民スチュワードの連携による災害復興・都市再生」では地方行政組織と個人の連携による市民スチュワードシップに着目した。調査対象にはルイジアナ州ニューオリンズ市の再開発公社(NORA)のランドスチュワードシップ事業（LS 事業）が管轄する４つのプログラム、コミュニティアダプテーションプラン（CAC)、グロウィンググリーン（GGP)、ロット・ネクストドア＋グロウィングホーム（LND+GH)、ノラグリーンイニシアチブ（NGI)、を取り上げた。これらのプログラムは、2005 年のハリケーンカトリーナにより引き起こされた洪水被害からの復興事業であり、市民と NORA の協働により、市内に点在する空地の管理と健全な活用により近隣の荒廃防止を目指すとともに、グリーンインフラ（GI）を導入し、今後予想される水害に対し、レジリエントな都市への再生を目的としている。NORA 主導の LS 事業の特徴として以下の点を明らかにした。

①時間をかけた土地の世話であること。単なる土地の売却ではなく、それぞれのプログラムに、GI の啓発、敷地売却・改良後のモニタリングプロセスを含むこと、

②NGI のパイロットモデル事業としてレインガーデンを建設し、GI の実体験を通じた市民の水循環システムに関するリテラシー向上が図られていること、

③小さなプロジェクトの成功体験を積み上げることにより、市民の自主的な参加とエンパワーメントを促進していること、

④NORA と市民スチュワードの連携により上位計画と小規模プロジェクトを接続し、都市全域のレジリエンスの向上へ貢献が可能であること。

LS 事業では市民による私有地の手入れという小さな環境への関与をきっかけに、市民スチュワードの活動動機となる環境倫理が環境の健全性から、災害に強いレジリエントな都市という環境の持続性へと展開している様子を明らかにした。

第３章「市民主導プロジェクトに見る市民スチュワードシップ」では調査対象として米国で行われている都市部での落穂ひろい運動、グリーニングプログラム（以下 GP）を取り上げ、市民スチュワード育成の場づくりと環境倫理概念の拡張を論じた。グリーニングは古くからの習慣であるが、2000 年代から次第に NPO などの団体により組織的に行われるようになっている。本研究では米国内に 244 の組織的 GP を確認し、都市部で活動を行う 45GP を対象とした運営者へのアンケート調査と、カリフォルニア州サンノゼ市の NPO が運営する収穫イベント参加者への対面インタビュー調査を行った。

これらの調査により、都市に残された極小の離散型農地や果樹での収穫イベントは①土地やコミュニティへの奉仕の場として機能するばかりでなく、GP 参加者自身がフードリテラシーの向上、健康なライフスタイルの実践など、受益者となりえる場となること、②都市部での GP は都市アメニティの提供や、食物による異文化理解の機会の提供など、より重層的で多様な役割を果たし潜在的な市民スチュワード育成の場となることの２点を指摘した。

さらに、GP は「食品ロスの削減」や「食品調達の代替手段の提供」といった直接的な都市の健全性、持続性を目指す環境倫理を動機としてその活動を開始していたが、次第に「健康な食材への公正なアクセス」や「食を介した異文化理解」などの社会環境の多様性や公正性の倫理、「都市部での自然アメニティ提供」といった都市環境の持続性の倫理へとその活動の動機・目的が展開することを明らかにした。

第４章「都市開発・設計における市民スチュワードシップ」では筆者自らが関与したサンフランシスコ・ベイエリアでの５つの都市設計・開発・イベントプロジェクトを分析の対象としてとりあげ、市民スチュワード育成の場を都市に取り組む仕組みや手法と、市民スチュワードの環境への関与にみる市民スチュワードシップの特徴を「文脈」「主体」「行為」の視点で整理し論じた。分析対象の５事例を以下にまとめる。

①「ピア 70」では市民のなじみが薄い工場跡地の敷地を対象に、アーリーアクティベーションと住民参加を促す対話型設計プロセスの手法を導入し、歴史的な文脈保全による多様性と真正性の確保の手法を用いることで、大型再開発においても市民スチュワードの育成と計画プロセスの統合が可能であることを示した。

②「ジャパンタウン」では、日系アイデンティティの維持と経済的な持続性の両立を目指し、市民のガバナンスの形成に応じた漸進的建て替え、時間をかけた合意形成、無形のコミュニティ資産の継承等の手法により、エスニックタウンとしての社会的環境の持続とこれを支える市民スチュワードの育成が可能となることを検証した。

③「オーシャンビーチマスタープラン」は、市の西端に位置する５km に及ぶ砂浜と隣接する上下水道インフラ、道路インフラを対象にした土木的スケールの気候変動対応策であるが、マスタープランの策定プロセス自体が、市民、多数の行政組織、NPO の連携・協働のプラットフォームとして機能することで、海岸環境を保全する市民スチュワードの育成の場となることを明らかにした。

④「Park(ing) Day」は、路上コインパーキングを時間限定で小公園として利用する市民参加型のイベントである。イベント手法のオープンソース化と短期・小規模な都市へのインターベンションは市民の参加を容易にし、世界各地で Park(ing) Day が開催されることとなった。都市部に出現

した小さなアメニティがネットワーク化されることで、都市の公共空間がもつ大きな可能性を可視化し、多くの市民スチュワードを育成することに成功していた。

⑤「レジリエントバイデザイン」では、今後予想される海面上昇へのレジリエントな対応を可能とする沿岸コミュニティの将来像の可視化を目標に、市民と専門家の協働ワークショップを行い、近隣住民に気候変動による長期的な環境変化を啓発する機会に設計プロセスを位置づけることで、市民スチュワードが育成されることを示した。

以上、都市設計や開発のプロセス自体が市民スチュワード育成の場としての可能性を有すること、そしてプロジェクトの規模や対象とする環境の文脈にかかわらず、都市設計や開発プロセスへの市民スチュワードの早期エンゲージメントやフィードバックの反映も可能であることを詳細な事例分析により明らかにした。

第５章「統括」では、第２章から第４章までに取り上げた米国での事例をもとに、環境倫理概念の拡張を「対象」「目的・動機」の視点により整理し、今日的な市民スチュワードシップの概念を俯瞰的に図解した。これをもとに、以下の三点から、市民スチュワードシップにみる環境倫理概念の拡張を総括した。

第一に、市民スチュワードシップの対象とする環境は、小規模な都市空間から、大規模な自然環境までその規模は様々であり、かつ市民スチュワードと環境は互酬的な関係性を有していた。そして、市民スチュワードは明確な目的・動機を共有することで、柔軟な連携を行い、多様な環境への働きかけを可能にしていた。これらは、第１章で示唆された今日的なスチュワードシップの３つの特徴と一致し、市民スチュワードの連携には活動主体となる市民による目的・動機の共有が有効であることを明らかにした。

第二に、市民スチュワードの活動動機は環境の健全性から、持続性・多様性へと展開し、世代を超えた環境整備や、さらには公正な環境づくりもその射程に含まれるようになっていた。

第三に、市民スチュワードによるインタンジブルな環境への働きかけに、場所に紐づくローカルナレッジを介在させることで、その場所の持つ真正性、場所のでどころを保全する仕組みが整えられ、結果としてタンジブルな都市環境にもこれが表現されることで、真正性の維持が可能な場所づくりが行われていた。

以上、本論文では、米国における事例調査と筆者自らの関わった都市設計プロジェクトをもとに、市民スチュワードの環境への働きかけの対象が自然環境から都市・社会環境へと拡大していること、その目的・動機は環境の健全性から持続性・多様性へと転換していること、これらの変化により環境倫理概念が拡張され、より包括的なものへと変化していること、そして市民スチュワードは共通の目的・動機を持つことで柔軟な連携が可能となり、大小さまざまな環境への働きかけが行われていることが解明された。さらに、市民スチュワードがもつローカルナレッジが環境関与の過程に介在することで、場所の持つ真正性、場所のでどころを維持する仕組みが整えられ、市民スチュワードシップの活動が都市部における「場所づくり」へとつながる様子が明らかとなった。

- 早稲田大学　博士（建築学）　学位申請　研究業績書

氏 名　　矢口　哲也　　印

（2020 年 7 月 2 日　現在）

種 類 別	題名、　発表・発行掲載誌名、　発表・発行年月、　連名者（申請者含む）
	（〇印は本論文を担う主要な業績を示す）」
論文	〇都市部での現代的グリーニングプログラムの持続可能な運営に向けた課題と コミュニティで果たす役割 矢口哲也，日本建築学会計画系論文集，第85巻，第722号，pp1263-1273，2020.6
	〇音声誘導システムを用いた視覚障がい者歩行支援実証実験 小田急線梅が丘駅・世田谷区立総合福祉センター間を事例として 矢口哲也，日本建築学会技術報告集第25巻，第59号，pp515-520，2019.02
国際会議プロシーディング	〇Successes and Challenges of Gleaning Program in the Urban Neighborhoods A Case Study of Gleaning Programs from the United States Tetsuya YAGUCHI, Sustainable Built Environment Conference, pp 6-14, 2019.09
	・Large Scale Urban Design Practice Focusing on Sustainability A Case Study of Qingdao Blue Silicon Valley Core Area, Shandong, China Tetsuya YAGUCHI, 11th ISAIA, pp 1915-1919, 2016.08
作品	・Thousand Island Tourism Master Plan, Chun An, China, 2017 The American Institute of Architect, Japan Chapter, Honorable Mention for Urban Planning, 2018
	・Pinghu Agritown, Pinghu, China, 2016
	・Pier 70, Central Waterfront Redevelopment, San Francisco, California 2012.06 ～ 2016.03
講演	・早稲田まちづくりシンポジウム2019，アーバニズムの現在と未来 大きな都市のビジョンと小さなボトムアップのアクションをつなぐ技術と思想 早稲田大学都市計画フォーラム，2019.07
	・Panel Discussion on Urban Resilience with SPUR, 2018.06.12

早稲田大学　博士（建築学）　学位申請　研究業績書

種 類 別	題名、　発表・発行掲載誌名、　発表・発行年月、　連名者（申請者含む）
その他 （博士論文に直接関係しない講演・発表）	・大学キャンパスのユニバーサルデザインの実態比較と導入に向けた考察（その 1） －日本と米国の施設管理者の計画意図に着目して－ 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.107-108，2019.7 野村祥子，矢口哲也 ・大学キャンパスのユニバーサルデザインの実態比較と導入に向けた考察（その 2） －日本と米国の聴覚障害支援の計画意図比較－ 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.109-110，2019.7 矢口哲也，野村祥子 ・都市に残された農地を活用した Local Food System の持続性について（その 1） － 大泉学園町における農産物の直売、営農の実態調査を通して－ 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.1113-1114，2019.7 石袁吉，本間陽輔，矢口哲也 ・都市に残された農地を活用した Local Food System の持続性について（その 2） － 大泉学園町における農産物の直売、営農の実態調査を通して－ 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.1115-1116，2019.7 本間陽輔，石袁吉，矢口哲也 ・夜間住宅地街路の光環境と心理的印象の関係 －住宅地との調和に配慮した犯罪不安軽減のための街路灯新設の検討－ 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.205-206，2019.7 中村優介，矢口哲也 ・自発的な緑化を取り入れた都市緑地計画 －東京下町地域での実態調査を通して－ 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.297-298，2019.7 砂川良太，矢口哲也 ・Park-PFI 制度の公募設置等指針策定の実態と策定までの障壁 その１ 手法の整理及び対象の地方公共団体の整理 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.325-326，2019.7 大森健太郎，片山雄斗，矢口哲也 ・Park-PFI 制度の公募設置等指針策定の実態と策定までの障壁 その２ 各地方公共団体の取り組み状況と分析 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.327-328，2019.7 片山雄斗，大森健太郎，矢口哲也 ・気候変動適応戦略の治水事業でのレジリエンス向上のための住民参加の実態 －ロッテルダムのベントヘム水の広場を対象として－ 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.379-380，2019.7 津田基史，矢口哲也 ・住み続けられるスラム居住改善への基礎的研究 セブ市ロレガ地区を対象として 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.801-802，2019.7 山田将弘，矢口哲也 ・下北沢の音楽・ライブハウス文化の発展と地域愛着の関係 ―下北沢音楽祭の変遷を通して― 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.1139-1140，2019.7 大石哲平，矢口哲也 ・観光統計とFlickr上に投稿された位置情報付き画像を用いた中小都市の観光特性の把握 日本建築学会大会学術講演梗概集，情報システム技術，pp.45-46，2019.7 山﨑凌，矢口哲也 ・街路の中心性・接続性と物理要素が立つ及び座る滞留行動に与える影響 渋谷センター街地域を対象として 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.857-858，2018.7 金子亮介，矢口哲也 ・SNSの利用により形成される都市のイメージ構造 Flicker 上にストックされた写真画像のジオタグと内容類似度に着目して 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.615-616，2018.7 矢口哲也，藤沼拓巳

早稲田大学　博士（建築学）　学位申請　研究業績書

種 類 別	題名、　発表・発行掲載誌名、　発表・発行年月、　連名者（申請者含む）
	・移動販売事業展開に伴う利用者同士における交流関係の実態　京王ほっとネットワークを題材として 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.833-834，2018.7 根本悠希，矢口哲也 ・都市機能誘導区域に見る拠点集約の実態　立地適正化計画を用いた多核連携型コンパクトシティの分析 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.423-424，2018.7 大森健太郎，矢口哲也 ・夜間の公園内歩道における印象評価構造の抽出と画像シミュレーションを用いた安心感を促す照明配置の検討 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.1153-1154，2018.7 中村優介，矢口哲也 ・小規模製造業の振興において地域イベントが果たす役割 国内6つの地域におけるケーススタディ 日本建築学会大会学術講演梗概集，建築計画，pp.901-902，2017.7 野村祥子，矢口哲也 ・仮設空間が街路の魅力形成に与える影響　新宿MOA4番街における歩行者の行動変化に着目して 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.307-308，2017.7 稲毛洋也，矢口哲也 ・中国大連市に残る日本住宅建築群の現状及び保護価値 景観を構成する建築要素とその歴史的変遷に着目して 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.639-640，2017.7 石袁吉，矢口哲也 ・リニューアルされた鉄道高架下が地域に与える影響 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.1085-1086，2017.7 片山雄斗，矢口哲也 ・タウンハウスに付随する閉じられた共用庭の利用実態に関する研究 エディンバラ新市街のコモンガーデンにおける公共解放に着目して 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.669-670，2017.7 吉田俊介，矢口哲也 ・高彩度色の被値と分布が景観評価に与える影響 日本建築学会大会学術講演梗概集，都市計画，pp.741-742，2017.7 上岡直樹，矢口哲也 ・作業行動を考慮したオフィス環境記述 ：その1 オフィス環境記述のための意味的環境の抽出 日本建築学会大会学術講演梗概集．D-1，環境工学，pp.845-846，1995.7 大石恵，矢口哲也，穐山憲，中村芳樹，乾正雄 ・作業行動を考慮したオフィス環境記述 ： その2 オフィス環境プログラミング試案 日本建築学会大会学術講演梗概集．D-1，環境工学，pp.847-848，1995.7 矢口哲也，大石恵，穐山憲，中村芳樹，乾正雄 ・オフィス移転前後のユーザーの満足度構造分析 ： その2 満足度構造分析 日本建築学会大会学術講演梗概集．E，建築計画，農村計画，pp.759-760，1993.7 矢口哲也，西尾達司，沖塩荘一郎，塚田幹夫